介護職で働いて思うこと

~外国人介護職者作文集~



認定 NPO 法人 IVY 2021 年度



目 次

は	じめに	認定 NPO 法人 IVY	外国人支援部門	西上紀江子1
作	文集の発行に寄せて			済生会 設長 峯田幸悦…2
外	国人生活の相談・サ	ーポートをして感じ	たこと	明脇エニータ3
*	介護職従事者作文			ンアは、"IN"と表示)
1	アンガ・ルスマ	ヘンドラ(IN・20	015) 「心でする	仕事」・・・・6
2	アルビ・バタラ・	•	•	感じたこと」7
3	栗田シモナ(ルー	マニア・2003 年)	「介護を通して日頃	考えていること」8
4	小林百合子(中国	・1984)「介護の仕	事を選んだ理由」・	• • • • • • 9
5	鈴木玲子(中国·	1996) 「わたしと	ニ介護」・・・・・	• • • • • • • 9
6	Bellatrix (IN • 20	020)「インドネシフ	アと日本の老人ホー	-ムの違い」11
7	ミツザ・ナジッタ	(IN・2020)「イン	ドネシアと日本の高	「齢者介護」12
8	ムハマド・バドル	ル・エクサン(IN・	・2019)「介護員と	しての経験」・・・13
9	山口カタリナカテ	リーン(フィリピン	✓・1987)「介護は雲	愛」・・・・・15
巻	末 山形県在留外国	国人データ・・・・		• • • • • • • 17



はじめに

認定 NPO 法人 IVY 外国人支援部門 西上紀江子

山形県には 7,826 人もの外国出身の方が暮らし、うち 93%はアジア出身の方々です(2020 年 12 月 1 日現在の在留外国人統計)。IVY は 1991 年の団体発足以来、日本語教室、通訳派遣、多言語相談等の活動を通して外国出身の方々と関わってきたのですが、その中の一つにスピーチコンテストがあります。外国出身の方々の声を、支援をしている人たちだけでなく、一般の方々にも届けたいという思いで、2008 年に始めました。はじめのうちは、結婚移住者と学齢期の途中で来日した移住者の子どもたちが主な参加者でしたが、いつしかインドネシア出身の若者が何名も参加してくれるようになりました。

時代の変化を実感していた折、ながまち荘さんで外国人介護職者交流会が開かれていることを知り、私も参加させていただくようになりました。参加してまず驚いたのは、多国籍の介護従事者がすでに山形にいらっしゃったことです。交流会では、毎回1~2人の方がミニスピーチをされていたのですが、回を重ねるにつれ、この方々の声を何とかして多くの方に届けたいと思うようになりました。その実現までには数年を要してしまいましたが、この度、9人の介護職で働く外国出身の方々の文章を作文集として発行することができました。

そもそも、外国語で文章を書くというのは大変なことで、母語でないと十分に表せないこともあります。一方、日本人ならしない言葉遣いの中に、妙に現実感をもって伝わってくるものがあり、文章が味わい深いものになる気がします。今回、9人の方が自らの来し方に思いを致し、文字に起こしてくださった文章を読み、私もこのように一生懸命な文章を書きたいと思いました。

この30年あまりで、山形に暮らす外国の方々は、出身国、世代、背景等あらゆる面で多様性を増したように思われます。山形という地域は、外国の方々にとって多少とも暮らしやすくなったでしょうか。

最後に、ご寄稿いただいた皆様、ありがとうございました。日本語検定や介護福祉士の試験を控えながらも時間を割いて、寄せてくださった方もいらっしゃいます。本当は、お一人お一人のお顔を見て、お話を伺いたかったのですが、その機会は今後に譲りたいと思います。また、彼らを日々応援し、見守っていらっしゃる施設の方々、ながまち荘の峯田施設長様、奥原様にもこの場を借りてお礼申し上げます。

作文集の発行に寄せて

社会福祉法人済生会支部山形県済生会 特別養護老人ホームながまち荘 施設長 峯田幸悦

当施設では平成21年度に山形県で初めてEPA介護福祉士候補者としてインドネシア人女性2名の受入れを行いました。それから12年、EPAに関してはこれまで計11名のインドネシア人を受け入れてきました。EPAでは山形県初の外国人介護福祉士合格者を含む3名のEPA介護福祉士を輩出し、現在はEPA介護福祉士2名、同候補者2名、そして令和2年に入職した永住資格のミャンマー人女性1名を加えた5名の外国人が介護現場で活躍しています。

当施設が外国人介護職を受け入れようとした目的は昨今のような"人材不足を補うためではありません。一つには EPA (経済連携協定) そのものの目的である "国際貢献・国際交流"、そして外国人を指導・教育する過程において"介護の質の向上"に資する」ものであること、更に、その過程そのものが"組織全体の活性化"に繋がること、最後に近い将来に訪れる多文化共生の社会を見据えた"外国人との協働を研究する"必要性を感じたことにあります。

実際、当施設では EPA をきっかけにインドネシアの看護大学との相互交流が続いていますし、インドネシア、ミャンマー、ネパール、モンゴルなどアジア諸国の人材と関係者、情報が行き交うようになりました。また外国人に指導するためには正確な知識技術を持ち、それをわかりやすく表現することが求められます。このことは日本人の学び直しや指導スキルの向上に繋がり、利用者に質の高い介護を提供することに繋がりました。介護福祉士国家資格を取りたい、インドネシアに介護施設や日本語学校を建てたい、国に残した家族の生活を支えたい・・・という大きな夢や使命感を持ち、謙虚な姿勢で学ぶ彼らと一緒に歩むことは介護現場だけにとどまらず、労務管理などにかかわる事務職にとっても互いを高め合う貴重な機会となり、組織全体が活性化しました。外国人材の受入れと協働は今でこそまだ"珍しく"、様々な方面から取材や見学、問い合わせを多くいただいておりますが、近い将来には、これが「スタンダード」になることでしょう。私たち自身や私たちの組織の「変革」のためにも良い機会になっています。

とはいえ、アジア諸国の経済成長、そして昨今は世界的な新型コロナの影響により介護業界で働く外国人材を取り巻く状況も日々刻々と変化しており支援方法の見直しを迫られる場面も少なくありません。国内の外国人材の動きに目を向ければ、EPA(2008~)、技能実習(2018~)、特定技能(2019~)、他にも留学生として学びながら働く人など、学ぶことを主眼にしたものから労働者性の高いものまで様々なルートで就労できるようになり多様性も増してきました。それ

だけに、個々に日本で働く動機・目的や背景となる国の事情、家庭の事情も違いますし、それぞれの事情が違えば、当然に来日して働く目的意識も異なります。これからは受入れ側も相手の国のこと、個々の抱える事情に関心を持ち、積極的に情報収集や勉強しなければなりません。もちろん、同じ国から来ても背景は違いますから一人ひとりと話し合うことが肝心です。しっかりと丁寧に向き合う中で、できること(背伸びする必要はありません)から一つ一つ始める、その姿勢が大切なのだと思います。彼らの人生を壊してしまわないためにも、これらをする覚悟がないならば取り組みを見直すべきです。これは外国人に限ったことではなく、実はすべての人が働きやすい職場、暮らしやすい地域をつくるために共通した取り組みであると考えます。「誰一人取り残さない」という"SDGs"の理念に通じるわけです。

近い将来に訪れる多文化共生の社会に向けて、私たち自身や組織の多様性への順応が今まさに求められているのだと感じます。



外国人生活の相談・サポートをして感じたこと

門脇エニータ

外国人の相談・サポートはなぜ必要なのか

これに取り組んでいる日本人はたくさんいるが、一方で、単に出稼ぎに来ているだけの外国人と軽く考えている日本人も残念ながらまだいる。考え方次第で外国人労働者を受け入れるにあたって対応は大きく変わっているだろう。グローバル化が進んでいる今外国人を分け隔てなくきちんと教育すれば良い人材が生みだされる。少し大変かも知れないが、受け入れる側の完全なサポートが必要不可欠なのです。

日本で新たな生活を開始するには住居手続き、銀行口座開設手続き、電話やインターネットの手続きなど、難しい手続きがたくさんある。生活していくためには日用品や食料品購入も必要だ。漢字で書かれているものも多く、多量の買い物をするのには非常に困難である。来日したばかりの外国人にとってはそれら全てが不安・負担であり、サポートがないとまともに手続きなどもできないのだ。

外国人を社会人と認めるためには日本語能力も向上させなければならない。特に外国人介護福祉士が高齢者と会話するには日本語コミュニケーション能力がとても重要になる。さらにはせっかく覚えた日本語も地方では方言に惑わされたりもする上、加えて難しい専門用語を覚えたりしなければならないのである。これらを全て丁寧に教える必要があるのだが、丁寧に教えても間違った理解が多発してしまったりなど、当然短期間で、日本語で、即理解するのは彼らにはとても難しいのだ。勘違い一つで命の危険にかかわる場合もあるため、母国語で相談やサポートが出来る人間がいると安心して勉強ができ、日本語の上達もより速くなり現場でのミスも少なくなるのだ。こうなれば優秀な外国人を確保することも可能であり、彼らが介護試験等の資格試験に合格することも夢ではないのだ。

日本人社員が外国人社員に歩み寄るという姿勢も忘れてはならない重要な視点だ。日本人と外国人とでは考えていることが違うことも多くあり、すれ違うことも多々ある。そのため、コミュニケーション第一で動くべきなのだ。そういった違いを相互に理解するという意味では、外国人社員の母国の文化を受容・理解してあげることも大切だろう。

いくつか私が感じたことを書いてきたが、やはり思うのは彼らの母国語でのメンタルサポートはなければならないということだ。サポートにあたることで現場が楽になったり、安全性の向上につながってくるのである。外国人労働者が自立出来るまではずっとサポートしなければならない。日本人社員にとっても外国人労働者から、言葉・文化など沢山学べることがあるに違いない。このような外国人労働者を採るということは新たな環境でのお互いの能力向上にもなると私は感じた。



心でする仕事

アンガ・ルスマヘンドラ

私は中学生から両親と祖父母と一緒に暮らしていて、病気でお祖父さんが亡くなりました。両親はまだまだ元気ですがいつかは介護が必要でしょうと思います。そのきっかけは EPA のプログラムにチャレンジしました。年を取っていく両親に介護を出来るように介護の知識などを学んでいます。

最初は介護って何の仕事か分からなくて日本で介護の仕事をしている 先輩より教えてくれました。日本に来る前に1年間日本語と介護の専門を勉強しました。その後山形に来て、全く分からない山形方言を始めて聞きました。利用者さんが何を言うか分からなくて困りましたが他の職員より意味を標準語で説明してくれました。

私は外国人なので利用者さん達の中に受け入れられるか、利用者さんが怖くないかと毎日悩んでしまいましたが声を掛けてみると笑顔で返事してくれてとても安心しました。利用者さんに介助した後に「ありがとうさま」と言ってくれると嬉しいです。3年間で国家試験を合格するために仕事しながら勉強しています。毎日勉強するのは大変で元々勉強することが嫌いでしたがこれからの将来のために頑張って勉強していきます。やっと 2019 年に介護福祉士を合格できて正職員になりました。

今まででもどんな正しい仕事し方か、どうやって利用者さんが満足されるか、 やはり介護の仕事は力だけでの仕事ではなく一番大切なのは心で仕事しないと いけないと私は思います。これから日本でもっと長くいて、専門の知識高めてい きたいと思います。

インドネシアと日本の介護の仕事の違いのはまずインドネシアでは介護福祉 士がありません。元々介護保険がないので対象は家族がいない高齢者などです。 その高齢者達は政府が提供する場所に集まっています。それで職員は介護福祉 士ではなく看護師の仕事です。



日本で介護員として働いて感じたこと

アルビ バタラ ピナユンガン

私は EPA 介護福祉士候補者として日本に来ました。EPA というのはインドネシアや他の国々との経済連携協定ということです。 2019 年 12 月に山形県の新庄市に来ました。 今は新庄市にある「特別養護老人ホームみどりの大地」という施設で働きながら日本語能力検定 N1 と、介護福祉士国家試験に合格するために一生懸命日本語と介護を勉強しています。

EPA プログラムでインドネシアから入国した多くの看護師は、EPA 看護師・EPA 介護福祉士またはその候補者として働いています。理由としては、海外経験をするということや、インドネシアよりも給料が高いということが一番の理由だと思います。私の場合はそれだけではなく、子供の頃から日本の文化、特にアニメが好きだという理由もあります。

2019年12月に約1年間の日本語の研修が終わって、いよいよ職場に来ました。働く経験が全くない私は、働くことを想像するだけでもとても緊張していました。研修の時に色々な介護の知識や技術、日本の文化まで学びましたが、実際に入居者様のお世話をしたことがないので少し不安感もありました。また入居者様に対しての介助(食事、入浴、着脱、排泄など)や介護に関する知識はまだ全然足りないと思ったので、実際に職場に入ると色々な困ることが出てくると考えていました。でも、みどりの大地の皆さんがとても親切で、何がわからないことがあったらいつも優しく教えてくれたり、困ったことがあったら手伝ってくれたりしたので本当に感謝しています。そして日本人の友達もいっぱいできたので、日本語能力も徐々に上がってきたと思います。

これまでおよそ1年半、介護職員として働いていますが、時がたつにつれて、私の介護の知識や技術も少しずつ向上しています。そして私の介護福祉士の見方も少しずつ変わってきました。日本に来る前は「介護福祉士はどんな仕事ですか?」と聞かれたときに、すぐに思い浮かぶのは「おむつを取り替える、ご飯を食べさせる、着替えを手伝う」ということでした。確かに、それも大事な介護の仕事ですが、実際に仕事をすると介護の仕事はただの「お世話」ということだけではなく、とてもやりがいがある仕事だと思うようになりました。なぜそのように思うのかというと、入居者様のご家族から「いつもみてもらってありがとうございます」と言われると報われた気がするからです。そして、入居者様からも「ありがとう、いつも悪いね」と言われるととても嬉しいです。自分は人の役に立っているのだなと実感できる仕事だと思うからです。

日本の介護業界は「人手不足」といわれますが、これは働く側からすると良い

ほうに作用することも多いのではないかと思います。つまり、逆に言えば採用されやすいわけだし、転職もしやすいからです。だから私はインドネシアの友達にも、日本で介護福祉士になることを勧めています。



介護を通して日頃考えていること

こころのクリニック山形 医療ディケア「らくせい」責任者 栗田シモナ

はじめまして。私は、ルーマニア生まれルーマニア育ちの栗田シモナと申しま す。日本に来て間もなく18年になります。

日本に来て、文化の違い(言葉の壁・食文化/生活様式の違い)や人間関係(差別:どこにいっても"ガイジン"扱い・孤独感:ほとんど友達がいなく、長い時一人で1週間以上過ごす時もあった)がうまくいかない日々が続いた中で、自分と向き合い、自分のこれからの人生を見直しました。社会に出て働く以上、仕事で思い悩む時期はきっと誰にでもあると思いますが、自分の生まれた国ではないから、5年ぐらいはいろんな壁にぶつかり、ぶつかって立ち直っての繰り返しの生活が続いた。資格もなく、右も左もわからないことだらけ過ぎる日々にうんざり。日本語を勉強し始め、資格取得を目指した。

介護の仕事に興味を持ち始めたのは13年ぐらい前になると思います。外国人でありながら、偏見を持たず、雇ってくださっている医療法人楽聖会(現在も務めている)に大変感謝しています。勤めてすぐの頃は、言葉の壁もあり、なかなか自分の思いをうまく伝えることができませんでした。そのため、必要な情報共有や意見交換がなかなかできない状況が続き、何度も「やめよう」と思うこともありました。その思いを留まらせてくれたのは、職場の皆さんのおかげでした。少しずつ働いている仲間からも認められ、日本語を教えてもらうこととなり、その結果、日本語が上達し、実際に覚えたことを他スタッフに教えることができるようになりました。苦手だったPCの操作も上達し、業務の効率が上がって、介護福祉士3度目の挑戦で受かりました。頑張り次第で認めてくれる職場環境があったからこそ、今の自分がいると実感しています。ご利用者やご家族に対しても壁を作らず、自分からたくさん話をかけて、コミュニケーションを大切にしました。様々な取り組みをしているうちに、自信がついて、いろいろなことに挑戦

し始め、いつのまにか12年がたちました。今では、ご利用者やご家族から指名 で相談依頼があるくらい、信頼関係を築くことができました。

約8年前から、副主任・主任その後責任者という指導する立場になり、頑張らせて頂いています。この立場に立てたのも、よりよい職場環境を作ってくださったおかげですので、私も役職としてさらにより良い職場環境作りに努めたいと思っています。私が目指したい職場環境は、職員間でのコミュニケーションを大切にし、職員同士が仕事や私生活を問わず、楽しく話し合えたり、悩みを相談しあえたりと、気兼ねなく話し合える環境づくりを目指したいと考えています。職員同士の信頼関係を築くことが離職率も下がるのではないかと思っています。一人ひとり良いところを引き出して、個性を伸ばすようサポートしていきたいと思います。この仕事は一人で行うのではなく、チームで助け合う仕事です。職場の人間関係がとても大切だと実感しました。

介護職として日ごろから大切にしていることは利用者及びご家族より不安なく利用して頂き、利用者及び家族とのコミュニケーションを密に図ることで信頼関係深めることです。常に利用者の相談に乗って、利用者が抱えている問題やニーズを発見し適切な支援を提供するように努めているようにしています。利用者の健康管理・健康維持のために、食事・排泄・清潔・活動・休息・精神面に対するケアを行うのはもちろんですが、利用者様一人一人を把握し、個別に合わせたリハビリテーション・プログラムを提案し、認知症や障害があっても、様々な活動を媒介に、楽しみや役割、他者交流などの機会を設けていきたいと常に考えています。



介護の仕事を選んだ理由

小林百合子

私は中国残留孤児の2世として1966年中国遼寧省で生まれ、1984年18歳の時、家族で日本に帰国してまいりました。日本に来て初めて聞く日本語は全然理解できませんでした。日本で暮らしながら、日本語の勉強をして少しずつ理解できるようになって、日本人と交流できるようになりました。日本語はじめ日本の生活習慣に慣れるまで時間がかかりました。今は不自由なく過ごしています。

私は、今訪問介護へルパーの仕事をしています。一日 6 軒から 7 軒の利用者 さんをもって回っています。利用者宅によって、お掃除、料理作り、買い物、入 浴介助、服薬提供確認、おむつ交換など行っています。その利用者さんの中に中 国帰国者もいます。中国語で介護しています。

私の父は、満州開拓団で中国に行き、終戦時8歳でした。家族と死別、あるいは生き別れになって残留孤児となりました。中国で長年暮らして大変な苦労をされてきました。父と同じ運命の人はたくさんおり、今介護に行っている多くの利用者さんも父と同じ年齢が多くおります。父もその利用者さんも子供のころ、大変な苦労をしています。老後になって少しでも幸せと感じるよう長生きしてもらいたいと、お役に立ちたいと思い、この仕事を選びました。



私と介護

鈴木玲子

私は 4 年前当時の職が終えて次の職をどうするのかを迷っていた時、周りから介護についての情報が沢山入ってきました。ニュースで介護現場は人手不足している事が良く聞くが、介護って福祉関係でもあり、前から日本の福祉制度は素晴らしいと思っていました。介護職に就く事に対して周りから賛成の声、反対の声もありましたが、とにかく介護について知りたい、学びたい気持ちが強かったので、老人福祉施設で働き始めました。私の国では「隔行如隔山」という言い方があります。つまりどんな職業でもそれ固有の専門知識があり、門外の人は分からないという意味で、介護経験のない私で、入職した当時は大変苦労しました。体を使って介護の技術を習い、頭を使って介護の知識を学びました。そして少しずつ積み上げた結果、今年の 3 月に介護福祉士の国家試験に合格し、今介護福

祉士として少し自信を持ちながら一人一人の利用者と関わって、人生の大先輩 達から沢山の事を学んでいます。

介護の事となるといつも自分の祖母の事を思い出します。祖母は仕事の忙しい 両親に代わって私を育てくれました。両親より私に愛情を注いでくれて、祖母の 事を大好きでした。日本に来ることとなった時一番心配したのは祖母の事でし た。年が取って、身辺の事が一つ一つ上手くできなくなっていく祖母の姿を想像 すると心配でたまりませんでした。当時の中国では年が取ったら老人ホームに 入って過ごすという考えが殆どなかったので、老人ホームに入所するのは殆ど 身寄りのない老人で自分の周りにはあまりいませんでした。

しかし、日本では老人施設は生活に身近な存在で、介護保険などもあり、老人福祉に国から大量の税金を投入している事を学びました。老後についていろいろの選択肢があって、家に居ながら介護を受ける事もあれば、様々な施設を自分で選んでそこに入所して介護サービスを受ける事も出来て、大変素晴らしい制度と思いました。約2000年前の思想家孟子が理想な福祉社会についてこう語った「老吾老、及人之老」の思想にあっているじゃないかと私は思います。今中国でも高齢化が進えみ、北京、上海など都市部は日本の福祉制度を参考して、介護をビジネス化にする動きもあります。今後の中国では日本スタイルの介護が普及していくのを期待しています。

介護していると、様々な老人と出逢います。まるで家族のように心配してくれて、ねぎらう言葉を掛けてくれる利用者がいて、時々自分の祖母と重ねてしまいます。自分の祖母なら同じことをするだろうと思うと何とも言えない懐かしさが感じます。また、仕事に自信がなく迷ってしまった時、利用者の笑顔と「ありがとう。」の言葉に何度も救われました。介護の仕事は大変遣り甲斐のある仕事で、これからも、一人一人との出逢いを大切にし、寄り添いながらその人を支えていきたいと思います。そして、同国出身者にも介護の良さを伝えていきたいです。

編集者注※1 孟子梁恵王上「吾が老を老として、以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として、以て人の幼に 及ぼさば、天下は^{たな}掌った運ばすべし」



インドネシアと日本の老人ホーム施設の違い

Bellatrix

日本はたくさんのユニークな文化を持つ先進国として知られている。その結果たくさんの人が桜の花で有名な日本に行きたいという結果となった。日本でユニークなことは、出生と高齢者に関しての発展の差が大きいことだ。その理由は、日本は高い労働倫理を持っていることだ。その結果日本人は家庭を持つことよりも、仕事に関しての方がより生産的だからだ。このことにより、高齢者よりも出生が少ない結果となっている。多くの人が30歳を超えても未婚なのは、日本人は仕事をするのが好きだからだ。その結果、たくさんの高齢者が家族もおらず一人で暮らしている。インドネシア人は、もし両親が老人ホームに預けられるとすれば喜ばないだろう。なぜなら子供が親を老人ホームに預けるようなことをすれば、親不孝という意味合いになる。それ以外にも老人ホームに両親を預けることは親と子供の間に悪い影響を与えるだろう。インドネシアとの違いは、日本は老人ホームで残りの時間を過ごすことを高齢者自身が希望していることだ。高齢者は老人ホームに入所するためなら喜んで順番待ちをする。

老人ホームでの暮らしは、利用者のあらゆる局面で生活がより保障されている。おそらくその理由は平均寿命がより高いからだろう。その結果、100歳もしくは 100歳を超える高齢男性と高齢女性と出会った。そこで利用者はすべての設備が揃う中で、特別的に扱われる。利用者らは家族の様にサービスの提供を受け、全て必要なことはすでに管理されていて、爪を切るような小さなことまでも介護士がお世話をする。設備までも五つ星ホテルのようである。臨時の医療対応のための老人ホーム施設専属の医師・看護師も揃っている。

人それぞれ重労働に関して持っている意見もそれぞれ違うが、介護士による 『利用者の入浴介助』と『利用者の移動の介助』は重労働である。入浴介助の中では、落下のリスクを避けるために慎重にする必要がある。その他にも、一人で立ち上がることが出来ない利用者を介護士がベッドから車椅子へ移動することも時間とエネルギーが必要になるだろう。

しかしながら、日本では全て利益として介護士に返ってくる。給料も高く、新しい文化を勉強し、海外での仕事の経験も得られ、偏見なく、言語能力も高めることができ、知識・技術もまた良いという側面もある。すべてを基礎能力として母国に持って帰ることが出来る。この学んだことを自身と周りの環境に利益として役立てなければなりません。この先いつかインドネシアに帰る際には、自身の成長のためにも知識と技術を持って帰ることが望みである。



インドネシアと日本での高齢者介護

ミツザ・ナジッタ

インドネシアの高齢者の数は日本より少ない。2020年のBPSデータによると、インドネシアの65歳以上の高齢者は1,600万人、つまり2億7,020万人の総人口の5.95%です。一方、日本では高齢者は29.1%の割合で3,640万人に達し、世界で最も高い。そのため、日本では人々の生活に役立つように多くの老人ホームが設立されました。日本では、老人ホームの労働者はカイゴフクシシと呼ばれています。つまり、目覚め、食事、入浴から排便まで、高齢者の生活を毎日助ける労働者です。日本の介護福祉は看護師ではありませんが、実施されている基本的なADLはインドネシアの看護科学資料にも見られます。日本では、毎月老人ホームに住む高齢者は高額な費用を払わなければなりませんが、それは得られる施設と同等です。これらの施設には、バランスの取れたメニューと栄養ニーズの一部、おやつ、マッサージ、お風呂、レクリエーション、個人衛生、医療施設への1日3回の食事が含まれます。

しかし、それはインドネシアとは異なります。インドネシアでは、高齢者がいる家族は通常家にいて、日常生活を手伝ってくれる家族がいます。しかし、一部のインドネシア人は、高齢者のニーズをサポートするために看護師やホームへルパーを連れてくるためにたくさんのお金を持っています。特に深刻な病気を患っており、より多くのケアが必要な高齢者は、看護師が助けます。そのため、インドネシアでは、老人ホームに住む高齢者の割合は日本ほどではありません。インドネシア人が家族を老人ホームに入れるとき、いくつかの要因があります:

1. 自分の欲望

- 2. 気にしない家族
- 3. 一人暮らし / 家族がいない / 不自由

インドネシアには2種類の老人ホームがあります:

- 1. 無料:国営の老人ホームと取得する施設は国によって決定されます。
- 2. 払う:家族は毎月支払う必要があります。一人一人が支払う料金は、選択した施設とは異なります。

そのため、インドネシアと日本の高齢者介護制度は、費用、設備、労働者の面で 異なります。基本的に、インドネシア人は家族を老人ホームに入れる心がありま せん。家族を老人ホームに入れると、他人の一般的な意見は、あなたは両親を愛 していないか、両親の世話をしたくないというものです。したがって、インドネ シア人は、両親や高齢者を老人ホームではなく個人の家に留めることを好みま す。

介護員としての経験

ムハマド バドルル エクサン

私はインドネシアの東ジャワのトゥルンアグンから来ました。トゥルンアグンはジャワ島の南海岸に位置する都市で、多くの有名な観光スポットがあります。私はジャカルタで会社の看護師として働いていました。

日本に住んで2年になります。現在、山形県新庄市でEPA介護福祉士候補生として働いています。2年後の介護福祉士国家試験合格を目指しています。私は、インドネシアの「G to G JAPAN フログラム」に参加したので、日本に来て働くことができました。

このプログラムは6カ月間無料で、日本語学習、食事、その他多くの施設を使用できました。先生の中にはインドネシア人だけでなく日本から来た人もいました。月曜日から金曜日の午前9:00から午後16:30まで授業を受けました。毎日、黒と白のユニフォームを着て行きました。そして毎月、きちんとした髪か、長くないかをチェックし、トリミングする必要がありました。

また日本語を学ぶだけでなく、日本の文化についても教えてくれました。例えば 茶道、相撲、太鼓、花見、花火、七夕、折り紙 などを知りました。日本の文化はとても興味深いです。もっと多くの文化を知りたいと思いました。

日本に入国後、愛知県豊田市にある研修センターで6ヶ月間日本語と、日本の介護を学びました。例えば食事介助について、移動や入浴の介助方法などがあります。テキストでの学習が終わったら、正しい方法でそれを練習する必要がありました。

私が働いている新庄市はとても寒い場所ですが、今まで風邪を経験したことがありません。新庄に来て間もなく、たくさん雪が降っていました。それでもいつもより雪が少ないと聞きました。初めて雪を見ました。

特別養護老人ホーム「みどりの大地」という施設で働いています。場所は広くて、新しい施設なのでとてもきれいです。ユニット型の施設で1ユニットに 10 部屋 があります。1部屋に1人の入居者様がいます。朝は、入居者様の起床と朝食を準備することから仕事が始まります。食事中や座っているときに入居者様を観察し、安全かどうかを見守りします。1人で食べることのできない入居者様には食事介助をします。食べ終わったら部屋に戻って休むのを手伝います。トイレに行きたい人がいたら、誘導し手伝います。オムツを着用している場合は、部屋で交換を手伝います。

しかし、介護の役割はより大きく、それは入居者様の健康を維持しなければなりません。例えばほとんどの入居者様について服薬の管理が必要です。間違えることがないように確認と記録をしています。施設の看護職員と連携して介護を行っています。

これから私は20年くらい日本で働きたいです。インドネシアでは海外、特に 先進国で働くことができる人は成功したとみなされます。仕事の経験を積むこ とに加えて、より多くの収入で生活水準を向上させ、日本で学んだことを活かし た大きな目標ができます。それは、20年くらい経ってインドネシアに帰国した 後、日本にあるような高齢者施設や通所介護、訪問介護の事業を起こすことです。 そしてインドネシアの高齢者の生活を豊かにしたいと思います。





介護は愛

特別養護老人ホーム慈光園 山口カタリナカテリーン

私は、13 歳の頃とても病気がちで、高齢の祖父母が世話をしてくれました。 幼いときの私が求めていたものは、介護と愛、優しさ、それがすべてでした。

私が日本に来たのは、21歳の時です。よいことも悪いこともあるなかで、私 は日本に恋をしてしまいました。30歳のとき、妻に先立たれた日本人男性と結 婚しました。彼には、3人のかわいい娘がいました。私は18年間、工場で働き ましたが、当時日本には外国人に対する経済的、感情的差別がありました。そこ で悲惨な体験をしたにもかかわらず、私は日本に戻りました。日本は素晴らしい 可能性をもった国です。どんな大災害に遭っても必ず迅速に復興し、どんなこと も絶対にあきらめないで立ち上がる、そんな日本に私は惚れ込みました。私は、 ある施設の夢を持っていました、その施設は「慈光園」、今私の職場です。偶然 の出会いかもしれないと思う一方で、介護者になる運命だったようにも思いま す。ここで、私は、自分の人生の旅で見失いかけていた、「介護、愛、そして幸 せの実感」を再発見しました。ふるさとを離れて暮らすのが私の運命なのでしょ う。家族に会いにふるさとに帰りたい、でも私はフィリピンの家族が将来にわた って幸せに暮らせるように、ここにとどまって経済的に支えなければいけない し、またそうしたいと思っています。私は、家族に会いたい自分の思いを犠牲に することを選びましたが、今年の6月23日に父を亡くしたときは、本当につら かった。コロナ禍で、私はふるさとに帰ることができませんでした。その傷みは、 私をいっそう強くし、もっと良い介護職者になるための努力へと駆り立てまし た。私が携わっている仕事には、課題もありますが、私たちは逃げることはでき ません。この仕事を始めたとき私は利用者さんを幸せにし、愛のぬくもりを感じ てもらおうと努力しました。当時、介護の現場には悲しみと孤独と不幸せそうな 顔があり、それが悲しかったからです。

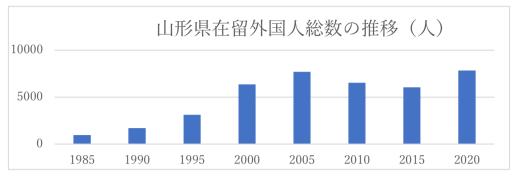
大切な利用者さんの家族は、私たちを信用して、ゆだねてくれています。それは、私たちが彼らの家族の世話をするという大変な仕事をしてくれるという確信を持っているからです。そのことは、私たちが、お年寄りの世話をする人というだけでなく、介護職者として認められており、私たちはしなければならない役割を担っているということを思い出させてくれます。疲労、ストレス、体の痛み、そして睡眠不足は、もはや介護職者としての私の頭の中にはありません。今の私、そして私たちにとって大事なのは、利用者さんの安全、健康、そして生きるエネルギーだけだからです。それが満たされてさえいれば、わたしの心は安らぎ、心

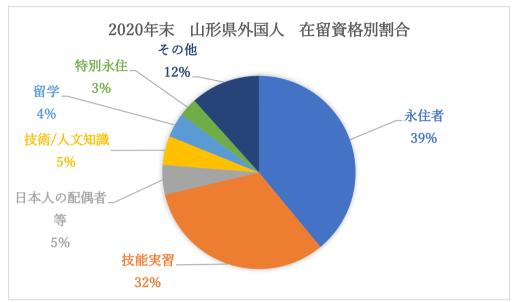
穏やかになります。介護職者ということばには、たくさんの仕事だけでなく、感情も内包されています。というのは、介護職者はサービスだけでなく、愛をも提供するからです。わたしは、介護職者として長い年月働く間にたくさんのことを経験しました。この仕事に私を留めたものは、この仕事に対して私が感じる誠実さです。「介護職者であることは私の天職で、そのことに感謝しています。そして介護職者であることはすばらしいこと」ですからご安心ください。しかし、大部分の日本の若者は介護職者として働くことに耐えられず、離れていく人もいます。日本の介護職者の不足は、2025年の高齢者の時代に向けて大きな問題で、高齢者人口が若年者人口より大きくなることが、海外に介護人材が求められる理由です。より高い収入で働きたい人たちに働く場を提供することが、介護職者の不足という課題の一部を解決してくれるように思えます。もちつもたれつのやり方で、働けば働くほど恩恵(高収入)が得られ、施設と介護職者は一体となれます。

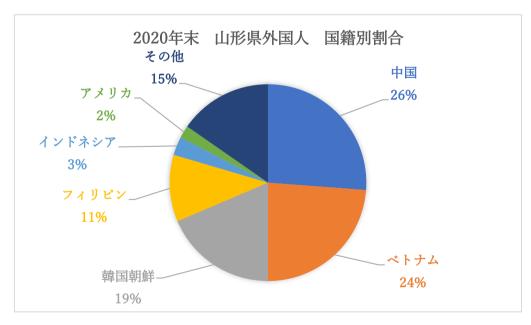
楽観的になることは、基本的にあらゆることを楽にしてくれるので、私が身を置くこの業界ではとても助けになります。人生において、楽観的でいるとすべてが順調に進みます。介護という仕事は、私にとってひとつの「達成(成就)」です。私の心と目標を介護、愛、そして他者への尊重に広げてくれるものだからです。

C-courage 勇気 A-acceptance 受容 R-respect 尊重 E-energy エネルギー G-goal 目標 I-integrity 誠実 V-victory 勝利 E-effort 努力 R-responsibility 責任









以上、法務省在留外国人統計を元に西上作成

認定 NPO 法人 IVY 発行 発行:令和4年(2022年)1月

(公財) 山形県国際交流協会 令和3年度民間国際交流団体活動推進支援助成金事業